

作品を味わうには時間が必要である。音楽・演劇・映画・落語・テレビ・ラジオなどの供給者が設定した時間に任された時間の二通りがあるが、実はその時間の中のごか「瞬がキモ」ところが、受け手にとって、一瞬で全体を把握することができる分野がある。美術である。味わうのに時間を必要としないからだ。出合い頭に「ドン」。

「その瞬間」は、理解とは全くの別物だ。それはいきなりやってくる。やられたら、ひびをたいて「おお、そうか」、あるいは頭をつかんで「やられた」、もしくは天を仰いで「(ほおをつたう涙)」という状態になる。

美術がわかる、わからない、という言い方は、繰り返すが、理解とは全然違う。その美術作品は一瞬で見た人を虜(とりこ)にするのだから、虜にされた人が後で、「なんでこの絵にやられたんだろう」と考えるというのが正

民報

サロン

しい順序なのである。

人間国宝第一号であった陶芸家故濱田庄司は、やられる名人であった。彼は器でも何でも、やられてしまうと、記念としてそれを必ず購入した。それを使いたいからとか、それを愛でたいとか、そういう理由ではない。これがコレクターの正道にして魔道だ。

わかるのは「一瞬」

川村 龍俊



わたしは「時間が必要な分野」には小さいころから親しんできたし、やられてもきたけれど、残念ながら三十歳を過ぎるまで美術が「わからなかった」。だからかな、一九九五年の秋、マーク・ロスコ展で、ついにやられてしまったときのごは、今でもありありと思い出せる。まさに雷に打たれて、

二時間以上も立ちつくしていたから。翌日また、見に行ったくらい。

数カ月後、現代美術を扱う画廊でのわたしと同年代の作家の新作個展会場でドアを開けた瞬間、空間が歪んでいくのを感じ、その作品を「買える」とに気が付いたのが運の尽きだった。濱田と同じく、コレクターの魔道に足

を踏み入れてしまったからだ。後は、何かに取りつかれたように画廊巡りをはじめ、次から次へと「やられ」まくり、お金を借りられる限界まで作品を買い続け、ついにお声が掛かってコレクション展を開催するまでに至った。その一部は社長室に飾ってあるが、来訪者は皆「コレ、なんですか?」と

きく。説明したら、わかった顔をしてくれるけれど、それでは、わかろうとして努力しているから「理解」なのだ。

仕事においては、理解が不可欠だ。なぜこの仕事をするのか。それはどのようなでなくてはならないのか。複数の人間との共同作業においては、結果を生み出すためのプロセスは共通の理解のもとに行われなければならない。目に「見える」ように表示したり図や絵を描いたりすると理解が進むのは、美術の「一瞬」で全体を把握することができる「特徴を生かしているからだ。

だが、仕事の結果は、お客さまにとっては「作品」である。それが美術のように「物」なら、一瞬でお客さまを虜にしなければ、それが音楽のように「時間がかかるサービス」なら、どこかで一瞬を呼び寄せなくては。それなしには、リピーターは生まれにくい(コレクターではなくてね)。…わかる。(須賀川市大久保、福島明工社社長)